

金子大榮先生を追憶して

—金子先生と『教行信証』—

松 原 祐 善

金子大榮先生には昨年十月二十日満九十五歳の天寿を全うされてご逝去なされた。色紙に「光輪」の二字をお書きになって、それを絶筆としてまことに平安なご往生を遂げられました。今日、先生とお別れして私は今更らに「真宗遇い難し」を痛感いたしています。先生が九十五年という長い労苦のご生涯を以て現代の思想混沌のなかに今日の世界を光として、浄土真宗の証道を開顕し、われらごとき愚鈍の身をお育て下された御恩の深厚なることを思うて感謝いたしているのでありますが、それと共に私は先生を失うことにより、先生を最後の一人として清沢満之直門の時代が終り、大谷大学としては否応なしに時代の大きな区切りが迫まっている感じがいたし、何か底なしの深い悲しみと痛みを覚えるのであります。しかし先生がお遺し下さった数々のすぐれた業績にお答えし、懇切を尽して大地から真実の宝を掘り起して下されたご労作に導かれ、後進の若き学徒が道念を呼び起し、時代の課題を提げて学道に奮い起たれるならば、その深いわれわれの悲しみもそのまま歡喜と新しい希望に転ずることでありませう。

私が最後先生の病床をお見舞いたしましたとき、先生のお言葉として、こんど東京の春秋社から清沢満之先生の著作集二巻、曾我量深先生の著作集十巻と一連にして私の著作集十二巻の刊行が企画されたことを聞いて、私はこの企画によって曾我先生とご一緒に清沢満之の浩浩洞の流れを汲むものであるということが歴史的に実証されてきたので

あつて、そのことが私の今生における無上の光榮であると、同じことを二度までも繰り返えし仰せられ、お別れに『光輪鈔』のコピーを頂戴して帰りました。清沢満之先生は今世紀のはじめ、明治三十四年（一九〇一）十月に東京巢鴨の地に開学された大谷大学の前身、真宗大学の初代の学監であります。金子先生は御自身その真宗大学の本科に入学した第一回の卒業生であつたと申されています。清沢先生は学問として宗教哲学を専攻し、日本における西洋哲学の草分けをなされた方であり、長く埋れてあつた『歎異抄』を真宗安心の第一の書として発掘し、精神主義を唱へ明治の仏教界に新鮮なる潑刺たる生命の息吹を吹き込んだ方であります。この清沢先生は四十歳を超えたとき、これから『六要鈔』を坐右から離さないでおこうということを門弟の多田鼎師に語られているのであります。先生は四十一歳の短命で明治三十六年（一九〇三）六月六日に啞血してこの世を終えられているのであります。かくして親鸞聖人の『教行信証』の研究は曾我量深先生と金子大榮先生のお二人にお譲りになつたので申すことができます。そして両先生とも九十五歳の長寿を保たれ、相携えて現代における親鸞教学を完成して大谷大学の真宗学の伝統を今日あらしめて下さつたのであります。金子先生の著述目録をみると、先生の主著とも称せられるべき『教行信証講読』三巻は昭和十三年十二月に「教行」の巻が刊行され、昭和十五年十二月に「信証」の巻、昭和十六年五月に「真化」の巻が刊行されています。そしてこの『教行信証講読』の原型は既に大正十四年十一月から昭和七年六月に至る、先生の個人雑誌『仏座』に執筆せるもので八十号を重ねて終了せるものであります。大正十五年十一月の記である「『教行信証』の講読に就いて」の一文のなかに

「愈々『教行信証』の解釈を書かうと決心せる時には、流石に私の内心は名状すべからざる振動を感じた。「自分果して『教行信証』の解釈を書くことが出来るであろうか」「出来る出来ぬは問題でない、書いて行くことである」「併しそんなことでよいであろうか」「善悪よりは願ひこそは根本的のものであろう」かかる内心の振動の中に私の願ひは早くも誓いを生んで来たのである。

第一にこの解釈に於て、自分は何処までもそれを自分の為にならぬ。われ自らの満足出来ぬやうなものを人が喜んで読んでくれる筈がないことは既に明かに知っていることである。そうすれば自分が書いたものに依りて自分が救われるやうなものでなくては、全く無意味といわねばなるまい。私は私自身の仕方では多過ぎる程説明するとしても、その説明を聞く正の相手は自分である。啓蒙的ということも、その蒙者は自分であることに於て避けず、論理ということも徒らに解釈の具にしてはならぬのである。

第二に自分はこの解釈に於て自分の全力を傾倒しよう。『教行信証』は元來、親鸞の仏教論であり、また生活の記録であるので、自分の解釈もまたわが生活の記録であり、また仏教の全知識であらねばならぬ。それ故自分の学問は惣べてここへ廻向し、生命も亦ここに捧ぐべきである。願はくは始終この精神を以て一貫しよう。」という誓いを以てこの事業に望まれているのであります。またそのなかに『教行信証』の主要問題として五項目を掲げておられますが、このことが私には非常に重要と思われるのでここに引用させていただきます。

「一、『教行信証』に現わるる第一の問題は「往相と還相」との二種廻向である。謹案_ニ浄土真宗_一有_ニ二種廻向_一、一者往相二者還相。就_ニ往相廻向_一有_ニ真実教行信証_一の文字は、『教行信証』の全篇を通じて唯だ二種の廻向を明かにせんとするの外なきことを顯はすものである。されば往相廻向とは如何なることであり、還相廻向とは何物であろうか。恐らくこれを明かに領知することこそは、純真なる宗教的要求を開顯する所以であろう。

二、次に來たる主要問題は「救済と自証」との関係である。それはまた古來「行信論」と呼べるものである。純一なる宗教的な行、それは唯だ念仏の外はない。誠に如実の救済は念仏の外に求むべきではないであろう。併しわれわれは如何にしてこれを信証し得るであろうか。親鸞は『行卷』に於て「諸仏称名の願」を顯わし、これに依りて三国の七高祖を代表者とし、幾多の大師はいづれも念仏を讃仰せざるものなきを説きつつ、『信卷』にありては三心一心の問答を中心として、専らに己証の領解を述べていらる。而してこの信念こそは、涅槃を証

得する因であるのみならず、さらに念仏に於て感知せらるる真仏眞土を領會するものである。

三、第三は「廻向と転入」との交渉である。(中略)それはまた恐らく宗教の論理と宗教の心理との關係問題であろう。宗教の心理は宗教の論理に依りて批判せらるる。併しその論理は心理を離れてあり得ない。それ故に眞実は方便を明かにすれども、その明かにせられた方便こそ、現実の宗教生活を顯はすものではないであらうか。

以上の三問題が『教行信証』の主要なものであることは、古来注意されたことであつたが、それにも関らずその実本当に注意されなかつたように感ぜられてならぬ。……われわれの人間の眞の問題はこの外に無いのである。然るにこの主要問題を終りて『教行信証』の結末に及ぶとき、この著をなせる親鸞の精神に就いて二つの注目すべきものを發見する。

四、その一つは教団の原理として眞宗を見ることである。『化身土卷』に於て何故に親鸞は、あの無戒名字の僧を弁護するような『末法灯明記』を殆んど全部引用するのであろうか。思ふにそれは教団の根柢を出家在家の區別に置かうとした従來の思想を批判して、新たに信の有無を以てこれに代るべきものであることを顯はさんである。即ち親鸞の意は敢へてその名ばかりの出家を弁護する爲でもなく、また殊に在家生活の意味を顯はさんが爲でもなく、實に出家と在家との區別などがあり得ないことを明かにすることに依りて、眞宗の信、即ち如来の本願に於てのみ、教団の根柢あることを彰わすのであろう。

五、他の一つは眞宗を以て日本の宗教たるべきものとして、これを國民にささぐることである。『化身土卷』の末卷に於て三宝に帰依するものは余道に事うることを得ざれといふことは、正しく聖徳太子の篤敬三宝の精神を徹底するものは浄土眞宗なることを顯はし、それに依りて拜天、祀鬼、占日等の迷妄を批判するものである。而してこの批判をなす所以は國民の自覺に訴えて正法に帰せしめんとするに外ならぬ。それは唯だ自覺に訴えるのである。余道に事うるを得ざれと強いるのではない。余道に事うる得ざる所以に眼覚めよといふのである。最

後の跋文もこの意に依りて、善く領解せらるるのである。

この二点は親鸞の「宗教と教団及び社会観」であって、これあるが為に『教行信証』は単なる独語録的な書物でないことが明かとなる。

以上の五事が如何に重要な問題であるかが知らるるだけでも『教行信証』は真面目なる求道者に依りて研究されねばならぬものであることが明かであろう」

と述べられています。『教行信証』の解題としてまことに適確でまた懇切を尽されたお言葉であると思われます。この『教行信証』に先立ちて、昭和二年八月に『教行信証の概要』が岩波書店から出版されています。その序にこの書は大正十二年三月より同十五年十二月まで前後六十回にわたりて御影の常明寺での講話せるものの摘要集であることが述べられています。この会合は先生の生涯にとりて劃期的なもので、その会合に於ける人々の敬虔なる求道心、あの堂に溢るる真摯な空気は如何に私を訓育せることであろうと述べて、御影の会合は私をして専念に『教行信証』の領解へと精進せしめたといい、その会毎にその要領を摘記せるものが、今は忘れえない記念となれるこの集録であると述べられています。

*

*

*

先般私は『大谷学報』から金子先生の追憶文を求められました、主として先生のお若い時代のご苦勞をお偲びしたのでした。昭和三年には著書問題に絡み、大谷大学を辞し僧籍まで離れられたのであります。昭和五年四月から広島文理科大学の吉田賢竜学長に迎えられて、講師として「仏教哲学史」を講ぜられることになりました。そのとき先生は五十歳におなりでした。この大学での講義が後に『仏教の諸問題』という著作となって昭和九年九月に岩波書店より刊行されました。また昭和十五年の四月には先生の名著『日本仏教史観』が同じく岩波書店から刊行されますが、広島時代の先生のご勞作として忘れることができません。

金子先生が再び宗門へ迎えられ、僧籍ももどられ、広島から京都の大谷大学教授に復帰されたのは昭和十七年の三月であります。先生は六十三歳におなりでありました。その折曾我量深先生も一緒に大谷大学へおもどりになったのであります。昭和五年三月以来のことであります。当時の戦局は支那事変から大東亜戦争へと拡大して食糧事情も悪く、国民の心は暗澹たるものであります。この年の七月十一日より満一ヶ月にわたる安居本講が曾我先生の『歎異抄』でありましたが、これは思出の深い講義でありました。当時満州の開拓地からの聴講生も多く、宗門では稀れに見る盛大な夏安居の行事でありました。後に出版されました『歎異抄聴記』は著名であります。私もその講録づくりに参加いたしました。こうしてわれわれは田舎から京都にでて曾我・金子の両先生に再会する機会を得たのであります。

ところで私のここで申しあげたいのは、金子先生の講演を拝聴し、そのなかでも私の生涯を通じて最も印象深く刻みつけられているのは、戦争末期の昭和二十年六月の大谷教学研究所の第一回講習会が大谷大学で催されたものであります。大谷教学研究所長は当時大谷大学長であられた大谷瑩誠先生でありました。その頃の大谷大学ではその前々年頃より学生は大阪の造兵廠の工場をはじめ、堺や尼ヶ崎の軍事工場に配属されて、しかも次々と工場のなかから応召して戦地に赴くというわけです。大谷大学では学生が一人も見られないのであります。従ってこの講習会に集った聴講生の多くは、全国各地教区を単位に、大谷教学研究所が中央の大谷大学に附属開設されると同時に、新しく開設され学場の代表者であります。国民服に戦闘帽をかぶり巻ゲートルという出立で聴講されたものであります。それもその筈既に全国の主要都市は戦災をうけて焼野原となり敗戦のいろは濃いのであります。私も大阪から空襲のなかを聴講に出いたのであります。もはや敗戦は疑う余地のない戦局のなかに、愈々真宗の教学はあくまでも護持されねばならないというたてまえから、この大谷教学研究所の講習会が開かれてきたのであります。この日の講師と講題は『日本的靈性的自覚』と題して鈴木大拙先生、『他力の自覚道』と題して曾我量深先生、『仏道史観』と題して金子

大榮先生のお三方でありました。鈴木先生は当時鎌倉にお住いでありましたので、東京から京都へ出ることは空襲のため容易でないので、あらかじめ原稿をお作りになって、当日の聴講生に宛てて送られてきたのであります。後に「大谷教学叢書一」として出版されました『日本の靈性的自覚』であります。この論稿をその日は杉平教授が代読されたのであります。曾我先生の『他力の自覚道』は、世親菩薩の一心帰命、善導大師の二種深信、親鸞聖人の三願転入と、他力信心の自覚道を、一・二・三と内に深く掘り下げられ、人間における自力執心の絶ち難く拭い難きを知らしめて、本願の廣大無碍なる大悲方便の世界を明かになされたようでした。残念ながらこの講演の筆記が整理されず、出版の運びとならなかったのであります。金子大榮先生の『仏道史観』は幸に「大谷教学叢書二」として出版されていますので、今日でも参照することができます。そのなか初の「伝統」について語られる一文を拾って見ますと、

「今日、朝から空襲がありまして、われわれはもう死を踏えて立っているのであります。こんな風なときに於て一体われわれの思想はどうか。皆さんはどんな風にお感じになるか知らぬが、私達にとつて、相当な問題である。で、精神というものはどうしても人間でなければ伝はらぬものであるか、……私はかつて、書いてゆくか話してゆくかということでご惑うたことがあります、書いたものは残る、話したものは消えるというような考えを持っていたが、それは違うということがこの数年来わかってきました。書いたものは消えるが、話したものは消えない。書いたものは図書館に保存されるというが、そんなものは保証できない。話したものは誰かが聞いている。誰も聞かんよといわれるかも知れぬ。私の心は聞かんでも私の肉体が聞いている。大学の講堂で話す、講堂がそれを聞いている。他日人あってこの講堂へ入れば、私の語ったことが本当に真面目なものであるならば、必ずその人に講堂が伝えるに違いない。これを学風という、われわれは谷大の学風というようなものに就て、少々如何がと思われる程自信をもっているが、そうしますと歴史的なことも感覚されるであろうが、もう一つわれわれは、道元禅師もいわれるように草木瓦礫に説法し、草木瓦礫がわれわれに説法するというような境地がありました、

これが伝統するのである。こういう点から申せば歴史的伝統という風になにかはつきりした条項を列記するといふことより、もっと深い宿世感情がわれわれになにか真実なものを感じしめるのである。云々」

と述べられてくるのでありますが、すでに死を踏まえた緊迫した情勢のなかに立って全身を以て先生の信念そのものが叫んでおられる如き感であります。この「仏道史観」の講演は昭和十五年の四月に刊行された『日本仏教史観』の「序論」と「余論」との課題をうけて展開されたもので、この著述の本論の内容は大きく三篇に分ち、第一篇は聖徳太子の仏教、第二篇教法流布の二方向、第三篇鎌倉時代の仏教、よりなっているのであります。その内容には入ってここで語ることは許されませんが、先生はこの著述の「序」の最初に

「この著は私の日本仏教に対する史観を記述せるものである。私はこの史観に於て二つの眼を用いた。その一つの眼は聖徳太子の聖旨を承けたるものとして日本仏教を展望せしめ、他の眼はその展望をそのままに親鸞聖人の真宗へと収撰せしめる。この雙眼の整合せる視野として、私の日本仏教史観の全領域があるのである。云々」

と述べられています。そして「本論」の三篇に入る前に「序論」がおかれて「日本仏教史観としての三願転入」が論述され、「本論」の終わったところで、更らに「余論」として「仏道の歴史性」が論ぜられています。そして講演の『仏道史観』はこの余論の課題を追究されたもののように思われます。

『仏道史観』という題目の下に、日本仏教史は日本人の仏道修行のあとであるということに就て大体申上げたのであります。『日本仏教史観』を書きました時分は、序論の方に三願転入という形で日本の仏教を見、結論の方では昨日までお話ししましたことを記しましたことが、ああも思われる、こうも思われるということであつたので、この度はもう少し両者の帰するところは一であるということを明らかにしたいと思ひ起つたのであります。

……

三願転入は、あたかも日本の仏教の歴史を読むような感じがする。聖徳太子の仏教は第十八願の御意である、

平安時代を貫くところの仏教は第十九願である、法然上人の名によって記されている仏教は第二十の願である、親鸞聖人によって説かれたものは第十八願であると、こういうようなことで、随分思い切った独断であろうかとも思いましたが、あの論文を書いた時は相当感激をもっていたのであります」（七七頁―七八頁）

と語られています。この引文中、「昨日までお話ししましたこと」とありますが、そのお話の主旨を大略おさえてみますと、ここで結論の方ではというのは著書の「余論」のことであります。この講演では

「仏道修行の間に転化し進展するのでありますが、そこに信心と発心と廻心という三つの重要な点を忘れることはできません。この三つとも或意味に於て初めである。これは不思議である。発心というのは初めであるという意味に於て適當の語であるが、内容から申せば道心という方がよいのであります。また回心というのも内容から申せば真心とでもいいあらわした方がいいかと思えます……

そしてこの三者は縦横の関係があつて、その具わるという点からいえば信心に発心も廻心も具えていなければならぬ。道心を具えていないような信心を迷心という。外道の信心と仏法の信心とはどう違うかという仏法の信心は道心をもっているということである。その道心が本當に道心といわれる所以は必ず信心をどこかで會得しなければならぬ。こういう意味で一を挙げれば他の二は必ず具わらなければならないことはいうまでもないのであるが、またおのずから転開がありまして、信心は信心であり、道心は道心であり、廻心は廻心であるといふことができる……それを混同することはできない云々」（二七頁―一九頁）

と語られる箇所がありまして、それが詳細に信心は聖徳太子の仏教に、発心は伝教大師の仏教に、廻心は法然上人の仏教に相応して述べられ、親鸞聖人の信心におさめられて説明されてくるのであります。それが昨日までに述べたところといわれる内容であります。

この年、昭和二十年七月には先生は宗門の夏安居本講に『正像末和讃』を講ぜられることになりました。その講本

の『正像末和讃聞思録』は先生の執筆になるものであります。当時私は先生から都講を仰せつかつて、親鸞聖人の和讃の世界に新しい眼を開かせていただき、親鸞聖人の末法史観に敗戦の現実を超ゆる道をいただいたのであります。八月に入って日本は恐るべき原爆に見舞われ、既に主要の都市は焦土化し、遂に無条件降伏の日を迎えて国民はあげて塗炭の苦悩に耐えぬく決意に迫られたのであります。思い出は尽きないことではありますが、おわりに『教行信証の研究』について一言しておきましょう。

昭和二十四年六月、当時宗門の戦争責任の罪はその責を大谷大学に問われ、マッカーサー司令部の指令によって先生は曾我先生とともに学園から追放されました。しかし昭和二十六年十二月に大谷大学名誉教授として大谷大学の教壇に復帰されることになりました。先生はもう七十六歳におなりでした。扱ていうところの『教行信証の研究』は昭和三十一年一月に岩波書店より刊行されています。この書の序に

「真宗の教は智を磨き徳を修めしめようとするものではない。ただ不安の生死に苦悩する凡夫を大悲しての法である。その意味に於ては仏教としても特殊のものである。されどまた、それなればこそ万人の帰依すべき道理を具ふるものである。しかしその道理は智徳に依りて見証せらるるやうなものではない。ただ謙虚に教法を聞思するものに行信せらるるのである。親鸞はその聞思の心に於て浄土の聖教を領解した。而してそれに依りて身証せる普通の眞実を顕はせるのが、即ち『教行信証』である。

これに依りて私は、この著に宗義と教学との二篇に分った。その宗義篇では専ら『教行信証』を貫ぬく事理を明らかにしようとするのである。その中心となるものは、弥陀の名に依る本願の眞実ということである。また教行信証に於ては、仏教学の方法を推求して聞思の意義を明らかにしようとするのである。私の思ふところでは、從來、眞宗を学ぶものも、また是非するものも、共に聞思の態度から外れてゐるやうである。それが『教行信証』の世界人心を潤ほすべき当然の功德を隠没せしめてゐるのではないであらうか。

私の力量は乏しきも私の願は深い。しかしその願が何れだけ達せられ得るかは、偏に大方の証明を俟つの外ないことである。その願に於て、この著はまた『仏教概論』『仏教の諸問題』『日本仏教史観』と進み来りしもの終結ともなるであろう。ここに私の思想生活を貫くものを出版していただきし岩波書店に、厚く感謝する次第である。」

と置かれていたのであります。この著は正しく先生の真宗学の到達点であり、即ち先生の仏教学の完成であると申して過言でありましょうか。世に最も難解の書として定評のあるのが『教行信証』であります。その『教行信証』がこの著書を通して現代の青年学徒にもその真髓に労少くして触れしめられることであります。まことに懇切を尽せる最もすぐれたる現代における『教行信証』の領解書であるということができます。更らに昭和三十六年には待望の親鸞聖人七百年忌を迎えたのであります。先生は八十一歳におなりの四月には岡崎の京都會館に於て鈴木大拙先生・曾我先生と相並んでお三人の御遠忌記念講演会が開かれました。講題は鈴木先生は「本願の根元」と題され、曾我先生は「信に死し願に生きよ」金子先生は「浄土の機縁」と題されました。この年の七月には安居本講として『顕浄土真実教文類』を講ぜられたのであります。それと共に『口語訳教行信証』を法藏館より刊行されました。この口語訳について先生は『教行信証』を「もつと自他に親しめるようにしたい願から着手した」ことを述べられ、各巻に感想を交えた先生の親切な領解が添えられています。この口語訳は単に『教行信証』の平易化・通俗化を意味するものでなく、あくまでも現代における日本人の仏典として、自分の死生を托する安心の書として『教行信証』を悩める庶民大衆の手にわたし皆共に安樂國に往生せんとの先生の倦むことなき悲願より出ずるところのご労作と私はいただくのであります。